

◎女性門下へ 祈りで幸の行進を

仏を「能忍」(能く忍ぶ)といいます。

忍耐強くなければ、「猶多怨嫉、況滅度後」等と言われる末法の娑婆世界で、法華経を説き、行ずることはできません。

この大難必定の前途を覚悟の上で、戸田先生を折伏の大將軍として、創価学会は立ち上がったのです。それは、大聖人の忍難弘通の大闘争にまっすぐに連なっています。(中略)

法華経は「万人成仏」の法です。人間の生命に巣くう無明を打ち破り、個々の生命を内面から磨き上げて、自身の尊厳と限りない可能性に目覚めさせていく。その一人一人の行動は、必然的に、さまざまな形で新たな変革の波を起こす。それは、既存の枠組みにすべてを収容しようとする既成の権力とは、全くベクトルが異なるものとなる。そこに、意図せずとも、摩擦や相克が生まれる。反動の圧迫もあり得ます。

最大の善意によって立ち、誠実の二字をもって社会に向き合い、友好の心をもって立正安国を願っても、こうした潜在的な緊張は避け得ない。ゆえに、「忍難」という不撓不屈の魂が、娑婆世界の広宣流布において不可欠となるのです。

(『女性門下へ 祈りで幸の行進を』 68 ページ)

◎幸福と価値を創造する仏法

正法を守るために戦うべき人が戦わない。それが、法滅を招きます。

大聖人の仰せ通りに正義を叫び、軍部政府によって投獄されたのが、牧口先生であり、戸田先生でした。

この時、よく知られているように、宗門は軍部政府の圧力に怯え、国家神道に迎合しようとしたのです。そのなかで、牧口先生は「一宗が滅びることではない、一国が滅びることを、嘆くのである。宗祖聖人のお悲しみを、恐れるのである」と、断固、正法正義を守り抜かれた。この殉教・護法の精神を貫く創価の師弟にこそ、大聖人の魂が脈打っているのです。

(『幸福と価値を創造する仏法』 51 ページ)